

## 依田学海の『蝦夷風俗彙纂』受容

——「蝦夷三孝子二貞婦」の典拠を中心に——

楊 爽

### はじめに

『読売新聞』明治二十五年二月五日の記事には、依田学海が「「落葉」の評」<sup>1</sup>を題にして書かれた次の評論が掲載されている。

凡そ一書のうちに必ず一の創見異聞をのせてもて人の識見を長ぜしむるは小説家の必ず用心すべき所なりさればがの有名なる曲亭馬琴が著書には一書毎に必ず一種の見解あり弓張月には琉球の譚をくはしく載せ俠客傳には南朝忠臣の系統を詳かにしるすその事は瑣細にして卑陋といへどもまた當世の風俗の一斑を見る可きものなり識見を長ぜしむるほどのものにはあらねどもかかる事は年過ぎ光陰去りしのちはその名だに知らずなりもてゆくものなれば小説家が心してしるしおかざれば遂にそれと知るよしなく後人これを知らんとすることもその彷彿をも知られざるものなり（後略）

依田学海は小説家がその文章に「創見異聞」を載せ、読者の見識を広めることに工夫すべきであると認識している。「創見異聞」の記述があるため、時代が変わっても、後世の人々は小説を通じて、当時の「風俗の一斑」をうかがえる。曲亭馬琴の『椿説弓張月』ならびに『開巻驚奇侠客伝』を焦点において論じる際も、それぞれの作品に、詳しく記録されている琉球譚、南朝忠臣の話は、当時の風俗を反映しているので、読者の見識を広めることに役立つものであることに注目している。ここで、学海が強調していたことは、ほかでもなく、作品の実用性である。

依田学海の小説観を具体的に論じようとするれば、まず挙げられるのは漢文小説集『譚海』である。『譚海』は人物伝記を主にして、名人の逸話以外に、畸人寒士、才女名妓などの異事畸行もたくさん取り上げている。川田甕江は序文で「廣見聞」を『譚海』の特色の一つとして述べている。本稿では、『譚海』の第一冊に収録されている北海道のできごとを取り上げた「蝦夷三孝子二貞婦」を論じたい。「蝦夷三孝子二貞婦」の材源を明らかにし、典拠と比較することで、学海の漢訳によって、作品に生じた変化を明らかにしたい。

### 一、「蝦夷三孝子二貞婦」と『蝦夷風俗彙纂』

「蝦夷三孝子二貞婦」<sup>2</sup>は『譚海』の第一冊に収録されている作品で、明治十五年に世に出されている。タイトル通り、この作品は孝子・貞婦の話を組み合わせて作られた人物の合伝で、北海道が背景となっている。作品は、「蝦夷我版圖。非可稱以夷也。然今日以舊稱。姑從時俗耳。土俗無文字。無教法。慄悍虓武。能搏猛獸。蓋天性然。顧有以孝義貞烈著是不可不傳。」（蝦夷は我が版図で、夷と称すべからず。ここでは、とりあえず当時の呼称に従って「蝦夷」と呼ぶ。そこには文字もないし、教法もなかった。猛獸とたたかう勇猛さはその人の天性である。このような人々の中には、孝義貞烈をもつて称する者がいるので、伝うべきである）という総論から始め、「孝子邊魯の話」、「孝子辨瑪那の話」、「孝子孝多の話」、「貞婦毛列津列

の話」、「貞婦禹厄的末津の話」の五つの話が紹介される。五つの話はそれぞれ独立しており、各話の関連性は薄い。

この「蝦夷三孝子二貞婦」の総論部分以外の五つのストーリーは皆、明治十五年二月に、開拓使によって刊行された『蝦夷風俗彙纂』という本を粉本にしている。国立国会図書館蔵本によれば、『蝦夷風俗彙纂』は前後二編、それぞれ十巻からなっていて、計二十巻である。開拓使長官黒田清隆の漢文で書かれた序文と編集者である肥塚貴正の和文序とが前編第一巻にかかっている。日付はそれぞれ明治十四年十月、同年九月である。序文の後には、「凡例」があり、各巻内容が示されている。「蝦夷風俗彙纂総目」と「引用書目」と続く。『蝦夷風俗彙纂』の奥付によれば、製本所は東京本郷弓町臨池社、並びに東京日本橋稲田佐兵衛であつて、発行書肆は京橋吉川半七、及び岩代国安達郡二本松太田勘助である。次に、黒田清隆の序文に基づき、『蝦夷風俗彙纂』という本の編纂の動機をみてみよう。

蝦夷之地上古邈矣不可得而詳也至齊明天皇時始置治所于後方羊蹄蓋距今千有三百年當時島民未盡沐于皇澤叛服無常要不過如唐時所謂羈縻州耳及蠣寄戈割據于松前驅役島夷為政一隅亦唯利其人不待以心類已而欲稍改其制未能也及今上親萬機首下詔置開拓使開山海之險通舟楫之便經野劃土分置州邑徙民奠居教以耕稼務革夷俗之陋躋之禮義之域撫而勸利而導之如此而經數年吾知其必為一樂土也顧近世記蝦夷者甚多其為書率皆卷帙浩瀚不便涉獵若猥碎混淆掛一漏百未有集而大成者也於是命僚屬就諸書纂輯命曰蝦夷風俗彙纂庶乎北陲數百年之變遷亦示諸掌矣且夫鳳簫之和徵於細管龍驤之運取於片帆則此書也寧不足輔國家禦侮北門之舉哉

開拓使長官正四位勲一等黒田清隆撰<sup>3</sup>

開拓使の設置は、北方開拓及び対ロシア防衛を目的とし、一八六九（明治二）年七月から一八八二（明治一五）年二月まで存続していた。また、黒田清隆（一八四〇年—一九〇〇年）が、開拓使次官（一八七〇年に任命された）を経て、開拓使長官になったのは一八七一年である。

同年八月に、黒田の献言に基づき、開拓使十年計画が決定された。黒田は北海道経営にあたり、外国人顧問団の招聘、札幌農学校の設立、屯田兵制度の導入、移民の招来、洋式農業技術の導入など技術から制度まで積極的活動を行った。北海道全域を開拓使の管轄下に置き、植民機関としての開拓使の機能を十分に発揮させ始めたことよって、北海道は居住植民地時代へと変わっていく。<sup>4</sup>しかし、莫大な資金をかけたせいで、十年計画の満期が近くなった一八八一年に、開拓使の廃止が一般的傾向になった。これに迫られた黒田が、開拓使の事業を継承させるために、部下の官吏を退職させて企業を起こし、官営事業を安値で民間に払い下げることと噂された。民権論者及び政府部内の関係者に利用され、一連の政治変動が起きた。これを「開拓使官有物払下げ事件」といい、明治十四年の政変のきっかけとなった。<sup>5</sup>この事件で、開拓使が廃止され、黒田も一八八一年に、開拓使長官を辞任し閑職に退いた。

前掲『蝦夷風俗彙纂』の序文の落款の呼称からみると、その成立時期は、黒田が開拓使長官辞任の直前であると思われる。『日本書紀』斉明紀五年三月条に、阿倍比羅夫が後方羊蹄に官庁を設置したと記されている。<sup>6</sup>この事例については、「時代は多少下るとしても朝廷を背景とした政治的権力が古くからすでに北海道にまで延びた例証とすることができ<sup>7</sup>。」と高倉新一郎が指摘した如く、黒田も序文で『日本書紀』の記述を踏まえて、日本政府の北海道統轄のはじめを後方羊蹄に政庁を置くこととしている。

また、当時の日本政府の対蝦夷政策については、「当時島民未盡沐于皇澤叛服無常要不過如唐時所謂羈縻州耳」と黒田は言う。その具体的な状況に関しては、高倉新一郎の次の論説を参考になる。

使臣を派遣して付近の蝦夷を集めて饗応し、応ずる者には賜物を厚くし、位階を与え、応じない者には武威を示して討伐し、年々朝貢させ、朝貢に来た場合には恩威ならび示してその服従を図った。これは蝦夷に限らず、当時の異民族に対する態度で、中国の異民族政策に学んだものであった。



さらに、蠣崎氏の蝦夷地管轄時代、いわゆる「前松前藩統治時代」は、永正十一（一五一四）年からのことであると高倉新一郎は『新版アイヌ政策史』で述べている。この年、蠣崎光広は、蝦夷地における実権を掌握し、北海道における内地人を統一し、土人に対して植民者独自の活動を開始した。松前藩が安東氏からの隷属を脱して独立したのは、天正十八年（一五九〇）のことである。蠣崎慶広は上京して豊臣秀吉に謁することによって、蝦夷島主であることを認められた。それ以来、寛政十一年（一七九九）東蝦夷地が幕府の直轄となるまで、松前藩は蝦夷地の統治を行った。この時代においては、「蝦夷地は松前に対して商業植民地として役立っていたのであった」と高倉新一郎はいう。

序文で、黒田清隆は従来の蝦夷地管轄の状況を述べ、その限界を指摘してから、

交通、行政区画、移民、農業、教育など、北海道に対する国の種々の開拓政策について記し、これらの政策の実行によって北海道は楽土になるに違いないと誇っている。近世の北海道関係書類は大量にあるものの、集めたものがないため、部下に命じて、諸書によって『蝦夷風俗彙纂』を編纂したと編纂の動機を示している。その編纂意図は、北海道数百年の変遷を示し、国の北方警備を補佐するとともに序文の最後のところからうかがえる。編纂者である肥塚貴正の序文も同じように、ロシアに対する危機感を意識しながら北海道海開拓の経緯及び蝦夷の有様を紹介するために本を編集することを記述している。

紙幅の都合で、肥塚貴正の序文の原文は省略する。肥塚貴正が序文で示している編纂動機について、高倉新一郎は「国力がこの辺地異民に及んだことを誇示する意味が基底にあるとはいえ、明治以降開拓使のとった急激な蝦夷同化政策により、身中には全く差別がなくなり、ただ風俗・習慣において色濃く残っていた特徴と、その差別によって生じた問題・政策を詳しくしようとしたもので、それはまず過去の記述を整理することによってそれに対応しようとしたものであった」と指摘している。

『蝦夷風俗彙纂』の「凡例」によれば、この本は蝦夷古来の習俗の紹介を旨として、諸書の中から資料を取って編集したもので、配列は必ずしも年代順ではない。文章は「蝦夷風俗彙纂総目」のように分類されていないながらも、必ずしも厳密ではない。違う分野のことが追加されたり、重複して記録されたりすることもある。引用書にある絵はすべて省略されていて、地名

人名物名は皆原書通りに片仮名で記述されている。

『蝦夷風俗彙纂』の内容構成については、「蝦夷風俗彙纂総目」で示されている。前編の十巻は原住民の起原・人種から始まり、沿革、人物、奇談、争乱、言語、衣服、飲食、薬餌、礼式、祭祀、祝賀、喪事などの内容から構成されている。後編の十巻には、それぞれ法則、給與・家屋、交易、耕漁・獣録、伎芸・遊戯、工業・器械、雑録（二巻）、外事（二巻）というタイトルがつけられている。これらの文章の典拠となっている本は「引用書目」に列挙されていて、宝永七（一七一〇）年から明治十三（一八八〇）年までの百七十年間の北海道関係書類八十三冊が網羅されている。この本について、高倉新一郎は「開拓使刊『蝦夷風俗彙纂』引用解題」で次のように評価していた。

使用した原本は必ずしも良本ではなく、またことにアイヌ語を表す仮名字に写し違いがあるという欠点がある。それ以外に、風俗研究に必要なそして多くの引用書に挿まれている貴重な絵が一切省かれていることも残念である。しかし、既に稀覯本に属するこれらの引用書は蝦夷に関する当時の主要書をほぼ網羅し。その限りでこれらの誌書を座右に置いたと同じ効果があり、その上読み易い楷書で書かれている点便利であって、北海道蝦夷すなわちアイヌ研究者には欠くべからざる立派な編著である。<sup>11</sup>

本稿で取り上げる『譚海』の「蝦夷三孝子二貞婦」の典拠となっているのは『蝦夷風俗彙纂』の前編第三巻に収録されている五つの話である。「蝦夷風俗彙纂総目」によれば、本書の第三巻は「人物」と題されている。そこにある計三十三篇の文章は、人物の性質によって「智勇」、「豪勇」、「義徒」、「孝子」、「烈女」、「奇術」の六種類に分けられている。そして、孝子類は順番に「コトレ」、「コレマカ忤三人」、「ペロ 亀松」、「アベハナ」、「孝多」の六つからなっている。孝子類の後に続くのは、烈女「モレッシ」、「チキリアシカイ」、「ウエテマツ」、「イムキマツ」の四つである。「蝦夷三孝子二貞婦」で取り扱われている

た人物は、登場順序で言えば、それぞれ「ペロ 亀松」、「アベハナ」、「孝多」、「モレッシ」、「ウエテマツ」、「イムキマツ」に対応している。併記して並べると、次のとおりである。なお、括弧内は『蝦夷風俗彙纂』の引用書である。

『蝦夷風俗彙纂』前編第三卷「人物」

亀松 (『蝦夷雑書』)

アベハナ (『蝦夷雑書』)

孝多 (初名…イカシカツ) (『千嶋史料』)

烈女 モレッシ (『近世蝦夷人物誌』)

ウエテマツ (『近世蝦夷人物誌』)

『譚海』第一卷「蝦夷三孝子二貞婦」ペロ

邊魯<sup>ヘロ</sup> 亀松

辨瑪那<sup>ヘンハナ</sup>

孝多 (初名…伊加志加津<sup>イカシカツ</sup>)

毛列津列<sup>モレッシ</sup>

禹厄<sup>ウエテマツ</sup>的末津

タイトルの類似だけでなく、『譚海』の「蝦夷三孝子二貞婦」の話の順序も、『蝦夷風俗彙纂』にある五つの孝子・烈女の記載順序と一致している。そのため、依田学海が『譚海』の「蝦夷三孝子二貞婦」を書く際に、案頭に参考として置いていたのは『蝦夷風俗彙纂』に違いないと判断できる。次節から、各作品の内容をめぐる検討に入りたい。

## 二、「蝦夷三孝子二貞婦」と「ペロ 亀松」

前節で、『蝦夷風俗彙纂』の基本状況および「蝦夷三孝子二貞婦」と『蝦夷風俗彙纂』の関連について簡単に触れておいた。依田学海は、『蝦夷風俗彙纂』から五つの話を取り、「蝦夷三孝子二貞婦」と改題して『譚海』に収録していた。本節では、両者が共通している五つの部分をそれぞれ併記して比較しながら、典拠に対する学海の利用方法について検討していく。

以下は、「蝦夷三孝子二貞婦」で省略された箇所<sup>(イ)</sup>に傍線を付し、加筆されたところに傍点を付けてみる。<sup>(ア)</sup>は『譚海』の「蝦夷三孝子二貞婦」の本文で、<sup>(イ)</sup>は『蝦夷風俗彙纂』の各篇の本文である。まずは、邊魯（ベロ）の部分を検討してみる。

『譚海』の「蝦夷三孝子二貞婦」にある邊魯の話<sup>(イ)</sup>を抄出すると、以下の通りである。

（ア）國後有孝子。名曰邊魯。其所居名門里志計。事母至孝。母年七十。凡土俗自食其力。父母兄弟各殖產業。不相救助。唯疾病衰老、然後仰給子弟。邊魯母老而健。不求助於子。然邊魯長工事。以治船為業。日有所得。買酒及米以奉之、身衣一單衣、食唯魚介、不喫一粒、人奇之。當是時。松前氏管領蝦夷。有商社派遣收買物產。社員號曰支配人。老有權勢。聞邊魯名與譯官謀。白松前侯以其狀。侯使人徧問土人。皆無聞言。每歲例班賜酒食。謂之於武志耶。蓋華言御赦也。是日眾夷皆會。特命邊魯居中座。譯傳賞其孝、賜錦袍一襲綿衣一領。又命酋長。部落有如邊魯者。具狀上陳。皆感泣去。明日有厚樗夷人龜松。年十二。來買煙草及穀物。問其欲何為、對曰將遺父母、蓋慕邊魯所為、其能化人如此。（『譚海』「蝦夷三孝子二貞婦」）

この部分の話の出典を『蝦夷風俗彙纂』は「ベロ 龜松」である。両作品を比較し検討するため、次に「ベロ 龜松」を挙げてみよう。

（イ）東蝦夷國後島の夷人に。ベロと云もの有。畧工匠の事を學び得たり。曾て嶋中のモンリーシケに居住す。老母あり年七十餘。是に事て至孝なり。常に會所にて舟工としては漁事をするに。その努力する事衆中に過絶せり。而して其工事の賃。漁物の價も。是を己に取ることあらず。或は酒に易へ。或ハ米に易へ。以て其母に贈る。寒烈の時と雖も。己が身にきる物はアツシ一衣に過ず。食ふ處は魚肉のみに過ず。身多病なりといへども。いさゝか其ゆえをもつて懈怠せず。

その勞苦甚だつとめたり。嶋中の夷人も是を奇と稱するに至る。是に於て支配人某。通詞某。役吏に白して曰。凡夷人の俗。物我町畦。父は子に頼らず。兄は弟に頼らず。唯老弱をしてハ。癡疾有て自ら渡世する事あたはあるの如きは。子たるもの弟たるもの。纔に其衣食を給はるのみ。然れどもまた以て念となさず。夷狄の俗從來如斯。然るに今ベロ其母老すといへども。病困衰殘自ら渡世する事あたはざるが如きに非ず。而して其衣服飲食より微の經用の具に至る迄。皆是を贈なし。一も母をし求索せしめず。以て其身を安からしめ。其心を樂ましむ。且身多病と雖も。軟弱を以て産業を廢せず。焦心腐腸以てその母を養ふ。實に夷人中の純孝と稱すべし。願ハ賞賛してもつて其孝を顯旗し。嶋中の夷人をして親に孝あるの道をしらしめむと。是に於て夷人の酋長ならびに。島中の夷人を召て諮問するに。皆言ベロ親をいやまひ。産業をつとむる事。嶋中の夷人實に儔儷すべきものなしと。乃ちオムシヤの日に當り衆夷列座の中に於て。殊にベロを中座に引き。酋長を其列に座せしめ。通詞をしてベロが至孝を褒賞する意をいはしめ。綿袍一つ綿一つを下與し。今より後ますます其志をつぎ。老母に孝すべきよしをいひ。且酋長には。嶋中の夷人ベロが如きものあらば。速に是を會所に白すべし。其餘嶋中の夷人をして皆ベロが行ひに效ひ。各其親を尊び養はしむべしなど。慇懃に諭したり。其明日擇捉の役吏近藤某の俱し來りし。厚岸の夷龜松といふもの。年纔に十二三なるより會所に來る。備賃をもつて。煙管品物類を買ひ求む。其志を推問するに答ていふ。是を厚岸に贈り以て其父母に與ふと。蓋しベロが事に感じて。親を尊むの意を表するなり。善にうつるの速なる。篤實の性愛すべし。夫れ夷人の朴質なる。豈偽て人の善を擬し。以て孝名を釣り。もつて賞賛を貪るの姦計あらむや。實に善に効はんと欲するの意。其肺肝より出るなり。是に由て之を觀れば。國家よく仁義の道をもつて。漸々に教導せば。夷人朴質の性。必其惡を去り。必その善にうつり。數年を出ずして。蝦夷の地悉く仁政に服し。ことごとく忠孝を尊はん事。それ猶置郵して命を傳ふるよりも速ならむか。〔『蝦夷風俗彙纂』「ベロ 龜松」〕

原作のタイトルは、「ベロ 龜松」となつて、二人の人物の合伝のようであるが、本文を通読すると、龜松という人物の設

置は、主人公であるベロを一層際立たせるためであることが分かる。龜松を中心に据える意識においては、二つの作品は一致している。物語の筋についても、「蝦夷三孝子二貞婦」の邊魯の話は『蝦夷風俗彙纂』『ベロ 龜松』を踏襲しており、学海の漢訳の姿勢が示されている。一方、傍線・傍点部分における省略や、加筆があること、ならびに叙述の順序に改変があることは留意すべきである。

学海の省略は、(イ)の傍線部分に見られるように、叙述ではなく、作者の議論を主な対象にしていることが共通点としてあげられる。たとえば、ベロの孝行について、原作は「焦心腐腸以てその母を養ふ。實に夷人中の純孝と稱すべし。願ハ賞賛してもつて其孝を顯旗し。嶋中の夷人をして親に孝あるの道をしらしめむと。」とあつて、島中の人々を孝の道へ導くために、ベロの孝を顕彰すべきと主張している。原作の最後の部分においても、蝦人の善はその本性であるため、国が仁儀の道をもつて教導すれば、数年後、蝦人は必ずその悪を除き、国に服従すると述べて、「ことく忠孝を尊はん事。それ猶置郵して命を傳ふるよりも速ならむか」と論評していた。ベロのことに龜松が影響されたことを踏まえて、北海道の先住民に対する教導・教化を達する有効な手段として、命令より、忠孝の事績に対する宣伝として龜松が取り上げられていることがうかがえる。

『蝦夷風俗彙纂』は、各篇の作品の末尾のところで、引用書目を明示している。それによると、前述「ベロ 龜松」の話は明治十三年の開拓使稿本『蝦夷雜書』からとったものである。この『蝦夷雜書』も北海道に関する記録を集めたもので、「中には運上屋の蝦夷取扱手續扣、蝦夷の風俗、習慣、口碑等の調、十勝国旧土人書類、安政・文政年間蝦夷戸口表など貴重なものが多い」といわれる書である。<sup>13</sup>『蝦夷雜書』ならびに『蝦夷風俗彙纂』は開拓使撫育政策の産物で、同化・教化による皇威宣揚を目指すという編纂動機を反映した部分として、前述本文の論評部分はとらえられる。

学海の作品は、「孝」を文章の主眼としている。「北海道の当時の風俗によれば、疾病や、衰老になってないなら、父母兄弟はみんな各自の力で生活し、お互いに助けあわない」というふうに当時の風俗を述べ、邊魯の行動と対照して、その孝を強調

している。原典にある論評は本筋との関係性が薄いと判断したため、学海は末節として省略したと考えられる。

しかし、原典にあるベロが多病であっても、母親に対する怠けずに孝行を行うことは、ベロの「孝」という人物像を一層際立たせるものであるにもかかわらず、学海がそれを省略したのはなぜであろうか。

(ア)の『譚海』の本文は邊魯に対する紹介から始まり、「事<sub>レ</sub>母至孝」の四文字で文章の主題を明示している。典拠がベロの孝行を先に紹介し、「土俗」をその次に示す叙事順序とは違って、学海は文章の主題を示してから、すぐに「土俗」の話に移り、「邊魯母老而健。不<sub>レ</sub>求<sub>二</sub>助於子<sub>一</sub>。」で終えている。これは、話題を邊魯の孝行へと変える伏線であると考えられる。また、「然邊魯長<sub>二</sub>工事<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>治<sub>レ</sub>船為<sub>レ</sub>業。日有<sub>レ</sub>所得。買<sub>二</sub>酒及米<sub>一</sub>以奉<sub>レ</sub>之、身衣<sub>二</sub>單衣<sub>一</sub>、食唯魚介、不<sub>レ</sub>喫<sub>二</sub>一粒<sub>一</sub>、人奇<sub>レ</sub>之。」と記しているように、簡潔でありながら、生動的に具体的な孝行を表現している。「奇」だからこそ、権力者の耳に伝わる可能性は大きく、次にある支配人の話の「人奇<sub>レ</sub>之」の部分とよくつながっている。ということで、原文にあるベロの多病のことを略することは、漢文を熟知したうえでの学海の工夫であると考ええる。この内容省略によって、文章のリズム感を損なうことなく、ベロの人物像が作り上げられている。

以上、学海の省略した部分について論じた。次に、「支配人」と「オムシヤ」を対象として、学海が作品での加筆部分について論じてみる。

十八世紀、松前藩が北海道を管轄した時期に、松前藩主や家臣が一定地域（場所）におけるアイヌとの交易を行ったが、「士族の商法で煩雑に堪えなかったので、漸次来往の有力な商人（場所請負人）に請負わせ、その場所を彼らに依托して、一定の運上を納入させる仕組とするようになった。」<sup>14</sup> 这样一种仕組みは場所請負制といい、「場所請負人は、請負期間中、運上金を定めて場所を請負ことが原則とした」<sup>15</sup>。また、場所請負人によって蝦夷地内の場所に設定した交易場を運上屋といい、そこには支配人・通弁・帳役、番人が詰めていた。学海はこの場所請負制のことを簡潔に「當是時。松前氏管領蝦夷。有商社派遣收買物産。社員號曰支配人。甚有權勢」とわかりやすく説明している。

原作にあるアイヌ語の「ヲムシヤ」について、学海は「歳例班賜酒食。謂之於武志耶。蓋華言御赦也。」というふうに、「於武志耶」との当て字を使った上、解釈を付け加えている。「ヲムシヤ」は蝦夷人が松前藩主より「酒食」を賜うことで、中国語でいえば「御赦」のことであると学海は理解していた。言い換えれば、「ヲムシヤ」は「御赦」と同じように、統治者から恩恵を給うことである。

しかし、高倉新一郎は『新版アイヌ政策史』で、「オムシヤ(ヲムシヤ)」の語源を論じる際に、次のように述べている。

オムシヤの語源は、あるいはこれをウイマムと同じく日本語の転じたものだとし、御撫謝だとか御赦だとかの文字にその起源を求めようとしているが、いずれも牽強附会、首肯するに足るものはない。

この指摘によれば、「ヲムシヤ」は「御赦」に等しい概念ではない。さらに、「ヲムシヤ」の語源について、高倉は次のように述べている。

オムシヤの語源はこれをアイヌ語ウムシヤに求めるのが最も安全なようである。アイヌ語ではuとoとの区別は余り明瞭でなく、これが内地人によってoと聞取られることはその例がすこぶる多い。uは「相互に」、mushaは「礼儀として他人の頭を撫でる」ことである。すなわち、アイヌが相互に頭を撫で合う一つの礼儀の意味である。ウムシヤはまたwumnye（通称ウリリ）ともいい、久しく会わなかった者が再会した時、互に向い合い、手を取って久闊を叙し、両手で互に頭から肩胛の方まで撫で下ろしながら語り合うアイヌの礼式である。<sup>16</sup>

また、大場四千男は「幕末期ヨイチ場所における林長左衛門の場所請負経営とアイヌ民族の勤労革命」で、「ヲムシヤ」儀



式の機能を論じた際に、次のことを指摘している。

「オムシヤ」儀式は初期においては松前藩主がアイヌと交易する一定の地域<sup>11</sup>場所に表敬訪問をし、現場での漁撈奉行（交易）をするアイヌ民族に報いるために宴会を催し、慰労する感謝の気持ちから生み出されたのである。

オムシヤ儀式は地域的立場から場所の共同体を維持する権利（納税徴収権）と義務（アイヌ交易品の貢納と賦役労働の提供）の契約を結び、永続的關係として宴会で確認するのを目的とする。とりわけ、オムシヤ儀式を特徴づける身分的宴会とその編成を神聖化しようとするのである。オムシヤ儀式は場所請負人による介抱の側面を色濃くし、介抱を使役（賦役労働）義務としてアイヌ民族に受け入れさせる儀式へ変容する。<sup>17</sup>

こうした「オムシヤ」儀式の研究からみると、学海が『譚海』で言及した「ヲムシヤ」は、場所請負制下のこのアイヌ撫育制度を平易な言葉で述べたものであると考えられる。完全で正確に漢文に言い換えることができないのは明らかで、漢文で表現する際の限界を示していると理解してもよい。一方で、当時の社会背景に関する啓蒙的な解説の加筆によって、享受層が容易に当時の風俗の一斑を納得でき、見識を広めると同時に、作品に対する理解を深めることができた一面も見逃せない。

学海のこのような省略・加筆について、もう一つ留意したい問題がある。『蝦夷風俗彙纂』の「ペロ 龜松」は、「東蝦夷國後島の夷人に。ペロと云もの有。」から始まり、また「常に會所にて舟工としては漁事をするに」とあって、ペロの仕事場を紹介している。この「會所」という機関は、一七九五年に、ラクスマンの根室来航をきっかけに、一七九八年に、近藤重蔵の東蝦夷巡察に伴い設置されたものである。ロシアに対する幕府の緊張感が高まったため、一七九九年に、幕府は東蝦夷を松前藩から取り上げ、直轄領地とし、旧来の運上屋を「會所」と改称して、行政統治を進めた。そのため、『蝦夷風俗彙纂』の「ペロ 龜松」の時代は、東蝦夷が幕領化されている期間に限定することができる。

それに対して、『譚海』の「蝦夷三孝子二貞婦」は「國後有孝子。名曰邊魯。」と始まっている。「ベロ」の当て字が「邊魯」となっている以外に、典拠本にある「東蝦夷」の呼称も省略されている。さらに、時代背景に関して学海は「當是時。松前氏管領蝦夷。有商社派遣收買物産。社員號曰支配人。甚有權勢」と加筆しており、松前藩が東蝦夷を管轄していた時期に変更している。

原作の時代が東蝦夷の幕領化された時期であるのに対して、学海は時代を前に遡って、松前藩管轄時期を作品の時代として設定した。そして、学海は人物の「孝」を強調するため、典拠の叙事順序を前後にして、先に「事母至孝」を述べ、次に「土俗」を伏線として敷いた。さらに、典拠本は開拓使が編集したもので、その政治的主張を反映した論評が多く挿入されているのに対して、学海のほうは、それらを省略して、当時の風俗を平易な言葉で解釈している。そのため、前文で検討した『譚海』の「蝦夷三孝子二貞婦」における「邊魯」の部分は漢訳でありながら、原作忠実な逐字訳にとどまらない。原作の内容をよく把握したうえでの叙述順序の変更、ならびに省略・加筆によって、作品に新しい風味を与え、「當世の風俗の一斑を見る可きもの」、読者の「識見を長ぜしむる」ものとなっている。

### 三、「蝦夷三孝子二貞婦」と「アベハナ」

次は、『譚海』の「蝦夷三孝子二貞婦」の辨瑪那の話と『蝦夷風俗彙纂』の「アベハナ」の検討に入る。それぞれの本文は以下の通りである。

(ア) 辨瑪那者烏延別夷也。年甫十四。以漁獵為生。晝夜刻苦。不辭寒暑。時置官署於根室。以瑪那廉謹。命為胥役。瑪那辭不就。使人諭之。瑪那垂淚曰。父母衰病。不欲遠去也。吏異其言。問支配人。對曰。不蒙問將言也。瑪那父曰耶麻古都異性愚騷。加以痼疾。不能自食。母亦似此。有子女三人。瑪那為長。餘皆幼仰食。若使瑪那服役去。四人並饑。其不願

為此也。吏憫之。乃議曰。瑪那孝義果如此。賜物賞之。不若許攜父母弟妹同徙根室以仰官俸焉。支配人告之。瑪那以頭頓地。曰。阿伊乃何多幸也、阿伊乃土人自言也。（『譚海』「蝦夷三孝子二貞婦」）

（イ）東蝦夷地ウエンベツの夷人。名をアベハナといふ。年纔に十四五にもやあるべき。されど漁事其餘の産業努力勉強せり。衆夷の中にも一層目立つ計の事なり。役吏某甚た是を奇なりとして根室に置き。會所の使ひ夷と為すべきよしひたるに。遠く離れ居りたらんには。親なるもの饑寒にせまれバ。ゆるし給るべきよし。番人をして申出たり。未だ年若き子の外に行たらんとて。其父母の左のみ困苦にいたる事。いかなる子細やあると問ひ尋ねしに。番人申けるハ。彼が父ヤマコトイといふもの。愚魯なる上瘡疾ありて。其身の衣食さへ辨じ得ず。母なるものも。性至愚にして。纔に柴薪など取りはこぶのみにて。夫を養ひ子を育ふ様のことにいたりてハ。いかにもある事なし。妹一人弟一人あると雖も。いとけなくして。たゞ人の撫育を仰ぐのみなりと。されバ彼一人勞力して。日々に産業をつとめ。父母に事へ。弟妹を養ふ。家中のもの皆彼に依頼して。活濟の道を得たるなり。かゝるゆゑによりて遠く離れ行たらんにハ。家中のものみな。手足を斷れし心地ぞいたすべき。されバ彼辭し申處道理にて。養老といふも實。による事ありなむ。いみじきふるまひにて。未だ十四五なるもの。かくの志ある事は。本邦の人とても多からず。まして夷人の中に於てをや。かゝるもの捨置たらんには。いかむぞ教育の意にかなふといふべき。其事いよく浮きたる事にあらざるか。よく案問して申出よといひたるに。いかで浮偽なる事の候べき。凡夷人の俗。もとより孝といふ事も忠といふ事も。辨へしらざる中に。年とても多からぬものゝ。かく父母を養ふ。弟妹をいつくしむ事など。實に千百人の中。一人もあるべしと思はれず。某などかねてしれる事にて候得は。とく告參らすべしと思ひまうけたれど。事多き身の打忘れて。いまだ申出る事のあらざりしなり。あはれしかるべき褒賞したまはんには。夷人の勵しにもなりぬべき事なりといふによりて。さあらばいかでたゞには打おくべき。此ものに褒賞せんハすべき様こそあるなれ。よの品物など遣したらんにハ。たゞ一時の事にして。廣く其孝を顯

はすといふべからず。されバ彼は父母弟妹ともに根室にうつらしめ。彼は番人の下に附て。日に會所に往來し。漁事等の業をなして。長く父母に事へ孝心を全くせしめるには。彼も其志を遂るをよろこび。又國家孝を賞するの意も。廣く遠くあらはれぬべき事なりとて。頓て此事國家にも啓し奉りて。彼が父母弟妹も残らず。根室にうつり居らしめ。殊に顧憐を加へたるに。是迄夷人ともうらやみのぞむもの多しとなん聞えたる。素より夷人朴質の性により。善事を見て是を倣ひ學ひ。孝子孝孫の多く出來る事ありなんにハ。實に國家仁波の餘澤。遠く夷狄の地に蒙るところもふすべけれ。蝦夷雜書『蝦夷風俗彙纂』「アベハナ」

ここで掲げている『蝦夷風俗彙纂』の「アベハナ」も前述「ペロ 龜松」と同じく『蝦夷雜書』から取られており、文章においては、両方とも開拓使の政策宣伝をもつて締め括っている。この部分の評言に対して、傍線部分で示しているように、学海は「ペロ 龜松」と同じく基本的に省略の措置をとっている。そのため、(ア)の『譚海』の本文は、『蝦夷風俗彙纂』の「アベハナ」よりずいぶん短くなった。

続く、原典に対する省略以外の部分における、学海の典拠の受容の仕方を検討してみようと思う。前掲作品と同じように、学海は、「東蝦夷」の呼称を略して、原作にある平仮名の地名・人名を当て字で表記している。

原作は、アベハナは年わずか十四五であるが、「漁事其餘の産業努力勉勵せり」とあつて、漁業だけでなく、他の産業にも従事していたアベハナの人物像を作りあげている。学海は、これに基づいて、「以「漁獵」為<sub>レ</sub>生。晝夜刻苦。不<sub>レ</sub>辭寒暑。」と勤勉な姿を強調している。昼夜・寒暑と問わずに、もっぱら漁獵を生業として努めていた辨瑪那を作り上げている。<sup>18</sup>

学海が作品で作りあげている辨瑪那は、もっぱら漁獵に従事し、単一労働をしている。大場四千男は、この単一労働による生産構造を「漁業型モノカルチュア構造」といい、「北海道＝蝦夷地の中で形成される松前藩の財政・経済基盤の中心にアイヌ民族の勤労革命を逆編成し、その民族的労働を漁撈の一点に絞り込み、集中化させる仕組のことである。」と述べていた。<sup>19</sup>

学海は原作にある「会所」という機関を「官署」にして、時代背景を曖昧化していたが、単一な漁獵労働をして、それを生活の基本として生計を支えていた辨瑪那は、松前藩が支配下の漁業型モノカルチュア（単一産品生産主義）を象徴する存在であると考えられる。原作の幕領化された東蝦夷の時代背景に対して、学海が松前藩支配下の時代を設定しているのは辨瑪那像の強調のためであろう。

さらに、学海の省略の特徴をみよう。原作には、「未だ年若き子の外に行たらんとて。其父母の左のみ困苦にいたる事。いかなる子細やあると問ひ尋ねしに」という番人の疑いに関する具体的な表現がある。また、アベハナの母の「愚」についても、「性至愚にして。纔に柴薪など取りはこぶのみにて。夫を養ひ子を育ふ様のことにいたりてハ。いかにもある事なし」と具体的に表現している。それに対して、学海は原作に沿いつつ、次のようにストーリーを簡潔にした。

辨瑪那が役人になることを断わるので、官署の人が辨瑪那にその理由を問う。辨瑪那は涙ながらに述べた。しかし、吏は疑いを抱えているので、また支配人に問う。支配人がその事実を述べると、吏は同情して命令を支配人を通じて伝えた。それを聞いた辨瑪那は感謝の意を表した。

このような展開や人物のやり取りを通じて、素朴でありながら孝子としての辨瑪那像を作り上げられている。原作にある番人や、母の対する描写は物語の本筋である「孝」との関係が薄いだけでなく、文章のリズム感や簡潔さをそいでしまう可能性があると考え、学海は主人公の性質を強調する本筋だけを取ったと思われる。

以上のように、叙事順序は原則としてそのままであるが、内容に対して、学海は主筋を明瞭かつ円滑に叙述し強調するため、大幅な省略をし、作品の中心を人物に置いた。作品の背景については、前述邊魯の話と同様に、原作の幕領時期から松前藩統轄時期に変えた。原作は、幕府・開拓使の撫育政策の賛美を目的としているので、前半のアベハナの孝行の話は、後半の

開拓使賛美のために敷かれた伏線である一面がある。学海は、極めて簡潔な言葉で辨瑪那の素朴と孝に主眼を置いて作品を作り上げている。原作に対する大幅な改変によって、作品の政治的色彩が薄くなり、原作の趣意を換骨奪胎することで、作品の主筋が明確され、人物中心の小説的な要素が強くなっている。

#### 四、「蝦夷三孝子二貞婦」と「孝多」

『譚海』の「蝦夷三孝子二貞婦」では、最後に登場する孝子は孝多である。次には、この部分の内容を記してみる。

(ア) 而又以孝著。官賜名代旌表者曰孝多、初名伊加志加津。孝多柔順溫和。事母至孝。娶妻生三子。妻亦類夫。夷俗出獵。必與妻俱。孝多獨留妻事母。妻出。己留侍母。未嘗頃刻相離也。母欲出遊。艱於步。孝多負而行。妻從其後。夷俗得衣食。不貯蓄。孝多獨藏精米數斗衣服數領。皆以供母。未嘗自服食也。安政丙辰。厚樞吏以事至久須利。會夷人賜酒。所謂於武志耶也。特召孝多命譯傳賞其孝。與米三苞綿衣三領。更賜以今名。於是孝多之名聞於遠耳邇、無復言初名者。(『譚海』「蝦夷三孝子二貞婦」)

この部分は『蝦夷風俗彙纂』の「孝多」によりながら、原典の内容を大量に省略している。その省略部分を傍線で示し次に挙げる。

(イ) 釧路の土人にイカシカツといふものあり。今は名を孝多と改め給りぬ。ことし三十八歳。父はさきのとし病にて果にき。今母のウレルトのみ残りて。齡八十を越えけり。孝多平生母につかふる事至て從順にして。いさ、かも母の心に違

ふことなく。その日ころ妻并三人の子孫等にも堅くいひ聞せおき。おのれ稼に出る日は。妻を家に残して母を護らせ。また妻の薪をこり。網ひきなどに出る時ハ。おのれまた家に居て母を介抱なし。夫婦のうちに一人は。寸時も母の側を離るゝ事なく。心をあはせて老母につかへけり。たまゝ外のかたへ出なむといへバ。脊に負て何處迄もゆき。母歸らんといふまでは。附添ひ居て慰さめけり。もとより蝦夷人のならひにて。平生衣食の貯へはあらぬものなるに。此孝多は母のためにとて。衣も幾重か米も精白に舂て貯へおきぬ。されどもおのれら夫婦はさらなり。三人の子供には。敝衣麤食をいとはず。また運上屋にて。つかはるゝにも。表裏なく働さける故。此兩人が舉止に感せぬものはなしといへり。安政辰年の秋厚岸の知縣釧路へ出張いたされ。オムシヤをおこなはるゝにつき。土人の日を追ふて御徳化に服従し奉るをみられ。此時に當りてまつ褒貶の沙汰をむねとなすよしにて。兼て會所へ申付られ。土人男女老幼とも。常に行狀の善惡詳に申出べくとなん。下司とて三役のものともへ申付おかれし事なれば。此時始て釧路土人イカシカツと申もの。老母につかふる事の次第を詳に申出たり。知縣は是を聞れさても得がたき所行なるかな夷中の類を異にして。斯孝心の者のあるも自然にして。御領に愛たき事なりけり。何ぞ申出るのおそかりける。幸ひ此節オムシヤにつきて。土人を残りなく呼出す物をとらす折から。彼孝子へは分てまた申聞はる事のあれバ。其趣を達すべしとなり。既にオムシヤの日になりければ。孝多は老母を脊負ひて來り。妻ハ孝多の後邊にしたがひて。會所の玄關前に蹲居す。時に知縣は上座に在て。下司もて。賜物且御條目をたからかに讀あぐけバ。通詞是を請て其次第を達し終り。別に孝多を呼出し。通詞もて達するやう。夷人に稀なる母に孝養の次第。尚常々妻子等へ申付方。神妙の至りなり。此よし箱館へ早々申上べきなれども。先當座の賞として。五斗入の米三苞。綿入布子三重ね。を取らるなり。この以後いよく忘る事なかれとなむ有ければ。老母を始め孝多夫婦は。こは何事にか。並居る夷人の其中に。おのれらのみ米衣を若干賜はれると。感涙を流し平伏してぞ居たりける。猶又通詞三右衛門は。衆夷の方へ打向ひ。孝心の奇特なるをもて。斯の如く御褒美成下さるゝ旨を申論しければ。御仁恤の肝にめいじてや。夷人ながらも低頭なし。すゞろに落涙して居たりけるとぞ。〔蝦夷風俗彙纂〕「孝多」

傍線を付した部分のように、学海は『蝦夷風俗彙纂』の「孝多」を底本にして、孝多の話を作る際に、特に作品の後半の議論部分に対して、大幅な省略を行った。これは、前述ベロ、アベハナの二作に対する取り扱いかと同じである。

『蝦夷風俗彙纂』の「孝多」が、『千嶋史料』（『蝦夷志料』、また『千嶋志料』）によるものであることは、原典の引用書目で明示されている。この『千嶋志料』について、海保嶺夫が「幕政史料のなかの蝦夷地と松前藩」（『列島北方史研究ノート』北海道出版企画センター 一九八六年五月）で、引用書目の一覧を作成している。また、谷本晃久・木田歩・山崎幸治らがそれを踏まえて、『蝦夷志料』引用書目誌稿<sup>20</sup>で、『千嶋志料』にある文章の典拠資料を明らかにしている。谷本晃久等の研究によれば、『千嶋志料』は、江戸生まれの国学者である前田夏蔭が、慶応元年（一八六五）に完成した全二〇九卷（他に総目錄一卷を伴う）に及ぶもので、独立行政法人国立公文書館内閣文庫に所蔵されている幕府献納本が正本である。本書の性格については、支配地の地誌の把握ほかに、海防や異国境取締・外交交渉に関する意図も含んでいると谷本晃久等が指摘している。

しかし、原典の政治的意図が露わな部分、特に「土人の日を追ふて御徳化に服従し奉るをみられ」から最後までの内容について、学海はただ二箇所のみをとっている。

ひとつは、「別に孝多を呼出し。通詞もて達するやう。夷人に稀なる母に孝養の次第。尚常々妻子等へ申付方。神妙の至りなり。」の部分である。学海は、「通詞」が伝えた具体的な内容を枝葉として省略し、「特召二孝多一命レ譯傳賞二其孝一」（特だ孝多を召し、通訳を命じてその孝を賞することを伝える）というふうには、原典の表現の趣意だけを取り、意識している。

もう一つは、「先當座の賞として。五斗入の米三苞。綿入布子三重ね。を取らはるなり。」の部分である。学海は、この部分を忠実に「與二米三苞綿衣三領一」と漢訳している。これ以外の、「土人」が徳化を感じたこと、会所にまで孝多の孝行の話が伝わること、並びに最後にある孝多一家が米などをもらって感激することなどはすべて省略している。

そして、原典にある「釧路の土人」という人物の出身に関する紹介までも省略している。作品の時代について、学海は原作



にある「運上屋」や、「会所」などの表現を省略し、ただ「安政丙辰」とのみその時期を示している。なお、原典にある「此よし箱館へ早々申上べきなれども」の記述からも、前幕府直轄時代の一八〇二年に置かれた箱館奉行所が文化四（一八〇七）年に松前に移った前の時期であることがわかる。

学海はこのような史実関係の記述を省略することによって、作品の史実性を損なったものの、主人公の「孝」という中心を印象づけている。また、原典の前半に沿って漢訳しながらも、人物の「孝」を具体的に表現する事項しか利用していないことも前述の両作品の利用方法と同じである。

## 五、二貞婦の話について

以上、『譚海』の「蝦夷三孝子二貞婦」にある三人の孝子の話を検討してきた。この節では、二人の貞婦について論じてみたい。学海の「蝦夷三孝子二貞婦」の毛列津列の部分は、『蝦夷風俗彙纂』の「モレツシ」によるものであり、禹厄的末津の話は「ウエテマツ」からとっていることは第二節で、すでに触れた。

典拠の『蝦夷風俗彙纂』の「モレツシ」も「ウエテマツ」も、その引用書を松浦武四郎の『近世蝦夷人物誌』に求められる。そのため、まずは、松浦武四郎及び『近世蝦夷人物誌』にも触れたい。

松浦武四郎とその著作である『近世蝦夷人物誌』については、高倉新一郎が『日本庶民生活史料集成』（三一書房一九六九年六月）の第四巻に収録されている『近世蝦夷人物誌』の「解題」で解説している。そして、花崎皋平『静かな大地 松浦武四郎とアイヌ民族』（岩波書店 一九八八年九月）でも松浦武四郎に関して詳しく紹介されている。先学に基づき、松浦武四郎の生涯について簡単にまとめると次のようになる。

松浦武四郎（一八一八年～一八八八年）は伊勢国（現在の三重県）の出身で、元竹四郎という。号は子重、多気志楼など多

数ある。弘化二（一八四五）年から、何度も蝦夷地に渡り、調査、探検を続けた。著作は『東西蝦夷地山川地理取調紀行』、『東西蝦夷地山川地理取調日記』など多数あり、北海道の状況を詳しく紹介している。ほかには、『東西蝦夷地山川地理取調図』のような詳しい地図を作った。明治二年、明治政府は蝦夷地に一一ヶ国八六郡を置くが、国名・郡名は開拓判官（従五位）に任命されていた武四郎の原案がほぼ採用されました。

『近世蝦夷人物誌』は松浦武四郎の代表作としても挙げられるものである。凡例で、この本は「其大概蒿溪の近世畸人傳、花顛子が同續編等に聊か倣らひて忠孝貞烈を主とし、篤行、惇撲、英雄また風顛無懶の徒に至るまで誌るす（略）」ものであることが述べられている。さらに、北海道について世人は詳しくないことを想定して、人物の事を記すまえに、蝦夷の地勢を述べ、その住所について紹介する配慮をしたことが凡例で示されている。

編纂動機・内容について、松浦武四郎は凡例で次のように述べている。

人物志の字たるや此地のもの詩歌連俳等の技無が故に、其等に附て一時名を四方に挙ぐるものなし。只此地の人物は忠孝五常の道を具し、豪氣勇傑のものなり。然るに其徒多くは貧窮の輩多し。人は貧しくて其行顯ることは少なからざればなり。（略）

此稿なるや、或人来て曰、此書三分か一は蝦夷地風土記、一は人物志、一は余が悪言なりと。余答へて曰く、其一なるや悪く云時は悪口、褒て是を見る時は余志有りと云べし。

松浦武四郎は『近世蝦夷人物誌』で、蝦夷の風土・人物志を紹介する以外に、随時論評を挿入して蝦夷地の品行ある人に対する賞賛並びに幕府の蝦夷政策に対する不満を表している。その編纂動機はただアイヌの「忠孝五常の道を具し、豪氣勇傑のもの」を記録し、称賛するだけのものではない。次の独松居士の「蝦夷近世人物誌叙」をみてみよう。

所憫乎蝦夷者非以其被髮左衽也非以其羶食穴居也憫其於君臣父子夫婦長幼之道未曾聞也苟於道有聞焉詎病被髮與左衽耶官設府所以治蝦夷者其意蓋在此歟然吾常異吏之來茲土者不務其本而區々於其末不考其實而汲々於其名利以誑之威以劫之剪其髮雜其鬚以期移風易俗之功於旬日間而一不從我所令輟鞭朴隨加彼亦得已改頭換面以苟免一時安能心中悅服是其所以治者適足以擾之也豈不亦謬耶友人松生有慨于此嘗告予曰治蝦夷猶治水在隨其性而善導之已矣夫至清而至順者水之性也擾之則滄逆之則激唯善知其清順而不擾之則不勞而治矣其遊蝦夷而歸也得夷民之事出於義行於道者而錄之釐為三卷（略）

被髮左衽は『論語』憲問篇第十四の十八にある「管仲微かりせば、吾其れ髪を被り衽を左にせん（微管仲、吾其被髮左衽矣）」からの典故である。散髪で、服の衽を左前にした格好は、かつて中華（漢民族）と区別されていた夷狄の格好で、野蠻で輕蔑されていた。<sup>22</sup>「羶食」の「羶」はもともと羊肉の臭いことを指し、「羶食」は主に生臭い肉のことを指す。そのため、引用文での「被髮左衽」や、「羶食穴居」はいずれも未開で文明化されてないことを示す言葉である。独松居士が蝦夷のことをあわれに思うのは、未開ということではなく、その地の優れている人情が世に知られていないことである。松浦武四郎の考えでは、蝦夷地の管轄は治水と同じことで、その地の人民の性質に応じて行うことが一番である。幕府が蝦夷地に対して強引な同化政策を行うことは、蝦夷地を混乱に陥れ、叛乱を招く結果しか生まれない。

以上のことから、松浦武四郎の『近世蝦夷人物誌』は蝦夷地の人に対する同情心のもとで記された作品として認識されるべきである。また、その記録は蝦夷の人の善行を世に知らせるためのものでもある。記録内容について、「凡例」は、次のように述べている。

書體雅ならず、俗ならず、文を饒らず、唯其信をしらさんと欲せばなり。其稿當月中旬に筆を起し、今日夕三卷漸々になる。（略）又事の實情を審にせんが為に、請負人、支配人、番人等の名をも加ふ事あり。（略）然はあれども、余は是を精

く見、審に聞てしるせし事なれば、聊か事實に相違なければ、敢て膝栗毛、妙々奇談のものにあらず、依て臥遊に供し給ふことなかれ。

「凡例」の落款のところには、「安政四丁巳の除夜」とあるので、引用文の「当月」は安政四年の十二月のことであると思われる。本の出版審査のことは心配であるが、それでも、自分が書いたものは見聞した事実であり、真実であることを強調するために、作品に登場する役人の真実の名前を明記しようと、松浦武四郎は考えたと思われる。

しかし、この真実性と批評性ゆえに、安政五年十二月に、松浦武四郎は完成した三編の出版願を出したが、出版許可は与えられなかった。それにもかかわらず、書き進めた松浦武四郎は安政七年一月十九日、その後半編を幕府に上納したが、また不許可になった。<sup>23</sup>人びとの目に触れるようになったのは、明治末年、孫の松浦孫太の手によって京華日報社発行雑誌「世界」第九十八号より第百十六号まで連載されてからのことである。<sup>24</sup>

未刊行の『近世蝦夷人物誌』が開拓使の編纂した『蝦夷風俗彙纂』の引用書として使われたのは、この本が出版禁止されてはいたものの、資料としての価値を幕府も明治政府も認めていたからと考えられる。

さて、『譚海』の「蝦夷三孝子二貞婦」に利用されている「ウエテマツ」は次のような話をしていた。

(イ) 西地石狩川すぢなるトツクといへる處に住しける。セツカウシといへるは。當年二十九歳にして。上樺戸の乙名を勤め居けるが。その妻ウエテマツといへるは。當年二十二歳にて。見目能く至て優くして。織繡の業をも善して。且常に勇氣あり。去る春も雪の上にて雌雄の鬨が。また兒鬨に乳を吸せけるを追退け。その兒鬨を捕へ歸りし事も有り。また今年も一疋を得たるよしにて。家の傍に飼有りけるが。此めの子番人某見染しより深く戀したひ。その夫セツカウシの濱へ連下り居る時。セツカウシを漁場へ遣し置て。數度をの閨房に行説しに。少しも承知せざりしが。若我になびかざる時

は。如此目見せんとて。度々漁場等へ遣り責使ハれしに。少しも屈せずして居たりけるに。後その男又聞へ忍び至りしかバ。陰囊をしめしとかや。番人の名は失念しが。當辰年はその陰囊痛みを發して稼に下らざりしとかや。依て當年は夫婦中むつまじく暮し。一人の男子を産せり。その番人の事を聞に種々の衣類等を持來り。是を與んといひ。またさもなき時は。責殺さんと云て。甚しき不法を申せしよしなるが。衣食は是にて足り居りしかバ。何の不足もなし。また殺るゝとも。何か命はおしからんと。少しもなびかざりしは。いと尊しとも譬るにものなし。此セツカウシは去年もスフシヤ越に召連しまゝ。今年もしばし連しかバ。委く此事は聞侍りしまゝ。しるしおくものなり。〔蝦夷風俗彙纂〕「ウエテマツ」

作品の最後にある「此セツカウシは去年もスフシヤ越に召連しまゝ。今年もしばし連しかバ。委く此事は聞侍りしまゝ。しるしおくものなり。」部分からみれば、ウエテマツの夫であるセツカウシは松浦武四郎と直接に接触したことがあり、少なくとも連続二年松浦武四郎の案内役をつとめている。

『竹四郎廻浦日記・卷の十』<sup>25</sup>には、セツカウシに関する次の記録がある。

安政三年五月十一日。朝飯支度等致し未明より搔上りける。召連候土人共申候に、今日はトツク泊りくゝと出精致して搔上る。其故を聞に、トミハセ<sup>(七)</sup> シツカウシ イタハウシの三人はトツク生のよしなりける。

この日、松浦武四郎はセツカウシがトツク出身のことをはじめて知った。おそらくこの時期、松浦はまだセツカウシに詳しくない。この日の日記の続く内容では、セツカウシが松浦の測量仕事を助けることがあったことが記され、さらに、その妻のウエテマツの名前も登場する。

(略) 上陸して其蘆原の中に到り、大きな柳の一本有り。上りてシツカウシ<sup>(七)</sup> トミハセ イタハウシの三人を召連行て針位を閲るに、昨晚閲たる処よりは大に場所開けて能眺望も致されたりける。(略) 夕方に相成候哉盲耆人、女夷人耆人、シヤクを背負て山より帰り来り、又川筋より女子夷人丸木船にて犬を乗せて帰り候に付、右の盲人イマシキネ白米壺升、女の子タマル ウエテマツ イルカマツの三人へ五合づ、遣したる。是等は我が召連し土人等の妻なりと。

また、花崎皋平<sup>26</sup>が参考文献として挙げている『滝川市史』を調べたら、セツカウシの関連記事があり、「セツカウシは幕末から明治にかけて本道を探検調査した和人の道案内役に何度も同行しており、ことに松浦武四郎の探検には三度とも同行している。」<sup>27</sup>とある。さらに、続く記録では、松浦武四郎の安政四年の『石狩日誌』にあるセツカウシ関連の記事がいくつか抜粋されており、その家に泊まったり、その妻の料理を食べたりしていることを通じて、二人の深い交流がうかがえる。

松浦武四郎がいうセツカウシとの「今年」と「去年」はそれぞれ安政四年、安政三年と考えられる。この「ウエテマツ」という作品が執筆されたのは安政四年だと推定できる。また、ウエテマツを慕った番人某については、花崎皋平の考証では、松浦武四郎が『丁巳日誌』では利七と明記している人物と考えられている。<sup>28</sup>

以上は、「ウエテマツ」の成り立ちを考察した。事実上依拠した話に対して、依田学海は『譚海』で「ウエテマツ」を前掲引用文の傍線部分を略しながら漢訳し、「蝦夷三孝子二貞婦」で「禹厄的末津」の話として掲げている。

(ア) 其一日禹厄的末津。得久人。其夫曰世津加禹止。貞婦貌甚麗不類夷種、而有膽氣。凡支配人使其隸監視漁事者謂之番人。多悍厲無賴。嘗有一番人。見貞婦美。每來漁場。甘言挑之。貞婦不肯。番人怒。虐役百端。冀其轉念。貞婦不少屈。一夕夫出在外。番人窺知之。暴然來逼。婦以死捍拒。擊傷其腎囊。番人懼逃去、告人曰、吾誘以美服、彼云敝衣足矣、逼以殺死、彼云欲殺即殺、未見頑愚如彼者也。(『譚海』「蝦夷三孝子二貞婦」)

両者を読み合せて比較すれば、学海が「ウエテマツ」を利用したことは明らかであり、ストーリーもそのまま原典を踏襲している。ただ、引用文の傍線部分で示したように、学海は貞婦が熊を捕まえることを省略した。また、松浦の論評部分と最後にある作品由来の記述をも略した。そのかわりに、作品の時代背景として支配人に関する記述を補足している。

また、貞婦の貞潔を表現するため、「以<sup>レ</sup>死捍拒」のような極端な表現を加えている。

松浦武四郎は作品の事実性を強調しているが、学海は人物の性格に着目している。学海の省略と加筆とによって、作品は簡潔でありながら、漢文の韻律感をもって、人物の「貞」が強調され、夫への愛情の深さと節操のつよさが表現されている。

学海の「蝦夷三孝子二貞婦」にある毛列津列の話<sup>29</sup>も、基本的に『蝦夷風俗彙纂』の「モレツシ」に沿って漢訳されている。ただ、原典にない「人煙稀少。榛荆塞<sup>レ</sup>路。熊羆怒號。聲震<sup>二</sup>林木<sup>一</sup>。蓋内地人無<sup>二</sup>一至者<sup>一</sup>。」という加筆の部分からみると、学海は漢訳した際に、修辭的效果についても意識したに違いない。

また、原典にある「運上屋」を「税館」にしたのは、平易さを心がけたためであろうが、それは史実性を損なう措置でもあった。この点については、前述孝子の話に関する措置と同じである。

## おわりに

以上、依田学海『譚海』の「蝦夷三孝子三貞婦」について、その典拠『蝦夷風俗彙纂』の五つの作品と比較を行った。

依田学海は『蝦夷風俗彙纂』の「ベロ 亀松」、「アベハナ」、「孝多」、「モレツシ」、「ウエテマツ」、「イムキマツ」の五つの作品を利用し、基本的には漢訳の姿勢をとりながらも、適宜省略・加筆を行った。その措置の意図については、以下の三点にまとめられる。

一、作品の時代性・歴史性を希薄にした。特に三人の孝子の話に対して、学海は大量の省略をした。三孝子の話の典拠となっている作品は『蝦夷雜書』、『千嶋史料』からの引用で、幕府の政治的意図が反映された資料でもある。そのため、典拠作品の内容は幕領時代の蝦夷地における幕府の撫育政策に対する宣伝を旨としている。「ベロ 龜松」については、「東蝦夷」を省略し、「会所」を「運上屋」に入れ換えることで、作品の時代を幕領時代から松前藩の時代に変えた。「孝多」について、箱館奉行所に奏上すべき内容を省略した結果、当時の箱館奉行所の役割は学海の商品から把握できなくなる。

二、史実性より人物の特性を重視し本筋としている。学海はこの本筋と直接かかわらない部分に対して、大幅な省略を行った。典拠作品はいずれも蝦夷地の実情を把握・紹介する意識が明白で、地理や社会状況に対する紹介がかならず行われている。特に、松浦武四郎の『近世蝦夷人物誌』から取られた「モレッシ」並びに「ウエテマツ」の二篇では、人物を描く前に、その地の状況が詳しく紹介されている。また、作品の事実性を強調するために、最後には作品の成立経緯まで説明されている。一方で、学海は作品で、モレッシとウエテマツの貞潔という特性に注目し、地理状況、成立経緯などをすべて略した。このことによって、作品は簡潔になり、直線的で分かりやすくなった。

三、難解な歴史上の名詞を平易に表し、作品の内容を読みやすくした。学海は作品で「オムシヤ」に対して、「毎歲例班<sup>二</sup>賜酒食<sup>一</sup>。謂<sup>二</sup>之於武志耶<sup>一</sup>。」のような簡単に通俗的な説明を行い、「運上屋」をその機能によって「税館」と呼ぶ。これは、本稿の「はじめに」で触れた「創見異聞」を述べることで、読者の見識を広めるという学海の小説観に一致している。

ただ、依田学海が『蝦夷風俗彙纂』を利用し、漢訳したことは確かであるが、典拠作品にある地名、人名など固有名詞については独自の措置が採られていることに留意したい。

例を挙げれば、初篇の龜松について、『蝦夷風俗彙纂』のほうは、「厚岸の夷龜松といふもの」となっているが、『譚海』の「蝦夷三孝子二貞婦」において、「有厚樫夷人龜松」となっている。地名は原作の「厚岸」から「厚樫」へと変わった。「厚岸」という言葉はアイヌ語の *atkeura*（アッケ・ウシ）に由来するもので、「アッケシ」と読む。「厚樫」は「アツカシ」と音



読みし、現福島県にある地名で、「阿津賀志」とも表記したことがある。発音が近いので、こういう入れ替えがされたか、あるいはわざと別の地名にされたかについては、証明できる資料がないので、判断できない。

また、「ウエンベツ」を「烏延別」にし、「ヤマコトイ」を「耶麻古都異」にしている。ただ、「モレツシ」を「毛列津列」にして、「アベハナ」を「辨瑪那」にし、発音を振り仮名で「ヘンハナ」と表記していることが、典拠本とは異なっている。

ほかには、「セツカウシ」を「世津加禹止」にし、「ウエテマツ」を「禹厄的末津」にしている。漢字の音を借用して、「ウ」を「禹」にした。「的」を「テ」と音読みする例は『唐話纂要』に出てくるが、白話小説にも熟知していた依田学海がその影響を受けた可能性があるかどうかはさらに検討する必要があると思う。

地名については、新井白石の『夷堅志』では、釧路を「クスリ」と読んでいる。学海は作品でそれを「久須利」というふうにしたのは、当て字としては自然である。シケロクを漢字の「志計呂久」にしたのも不自然ではない。ただし、ナイブトを「那伊武止」としたのは学海の独自のアレレンジと認識してもよいであろうか。

「蝦夷三孝子二貞婦」のアベハナの部分では、「阿伊乃土人自言也」とあって、「阿伊乃」が土人の自称というふう述べている。ふりがながないが、「アイノ」の当て字と考えるのは妥当であろう。アイヌ語では、アイノは自称として使われ、manの意味である。<sup>30</sup> この一連の当て字の使いから、学海は北海道に対する一定の知識を持っていたと認識してよいであろう。

黒田清隆の上奏をきっかけに、明治十四年、天皇が北海道に巡幸した。この度の巡行は、三木強が述べるように、「目的はあくまで開拓の実況をみるということに主眼が置かれていた。(略)その特徴として、アイヌとの接触が挙げられる。(略)

開拓使官有物払下事件の渦中にあつておこなわれたこの巡幸は、人々の目を北海道に強く注がせた」<sup>31</sup> 開拓使官有物払下事件と天皇巡幸により、北海道に対する国民の関心が高くなります高くなってきたことは当時の新聞紙からもうかがえる。さらに、北海道移民の政治的宣伝のため、当時の記事は北海道の人々の品行を称賛するものが多かった。この時代背景と関連づけて考えると、学海の北海道についての知識は時流に即して生まれたものもあり、「蝦夷三孝子二貞婦」という作品は学海の時事へ

の関心を反映している作品であると考えられる。

さらに、松浦武四郎について、学海は日記で次のように述べている。

明治十九年一月五日。晴。(略) 午後、杉浦梅潭を訪ふて有竹裕<sup>マヤ</sup>にあふ。裕、去るとし北海道にありて某県の大書記官たりしが、いかなる故なりけん、自殺せんとして終にならず、久しくやみしが、今は癒たり。梅潭、余に古き艸子を示す。そのうちに、梅暮里谷峨の著し、傾城買二筋道といふものあり。山東京伝の序あれば天明のころのものにや。(略) 又、松浦武四郎が去年乙酉のとし四月の末に東京を發し、吉野の奥なる大台原に至りし事をしるせし日記を示さる。此人今年七十有余にして、大台山は絶嶮幽僻、役小角・行基等も未だ至らざる地なり。山中に露宿すること三日余に及ぶ。文、佳ならざれども詳にして且尽せり。漢文をもて飾りたるものに比すれば実を得るに近かるべし。この山に西中原といふ大瀧あり。無双の奇景なるよしをしるす。又この山中、ほうそ兀といふ所に牛石といふものあり。(欄頭)「此書多く兀の字をしるしたり。何とよむにや。松浦にあはゞとふべし。」(後略)<sup>32</sup>

杉浦梅潭(一八三四年―一九〇〇年)は漢詩人であり、最後の箱館奉行としても知られている。明治に入っても、開拓使権判官、開拓使判官を歴任した。杉浦については、依田学海は「杉浦梅潭先生伝」で詳しく記している。学海が杉浦の家であった有竹裕<sup>マヤ</sup>も、杉浦より日記を見せられた松浦武四郎も北海道の関係者ということで、杉浦と知り合いになったのであろう。

『学海日録』で、松浦武四郎に關係する唯一記録されているのは前掲引用文の明治十九年一月五日の日記である。杉浦のところで学海が読んだ松浦武四郎の日記は松浦の『乙酉紀行』のことである。これは、松浦が明治十八年四月十四日に東京を出發し、京都、大阪、神戸、伊勢などを経て、最後に東京に戻るといふ旅程の記録である。この旅は、四十八日も続き、大台原探查を目的としたという。

日記にある「此書多く元の字をしるしたり。何とよむにや。松浦にあはゞとふべし。」から見れば、それまで学海は松浦とは面識がなかったことになる。そして、学海が松浦に会った資料は管見の限りなく、松浦が世を去った一八八八年までの二年間に、二人が直接に接触した可能性は低いと思う。

学海は「文、佳ならざれども詳にして且尽せり。漢文をもて飾りたるものに比すれば実を得るに近かるべし。」というふう  
に松浦の詳細な記述を称賛した。しかし、「文、佳ならざる」ことを評価したので、学海は『蝦夷風俗彙纂』にある松浦武四郎の文章を利用した際に、アレンジしたのであろう。

また、前文に触れた松浦武四郎の『近世蝦夷人物伝』の序文を書いた独松居士（向山黄村）も学海と親交がある人である。そのため、学海は「向栗二先生伝」、「向山黄村伝補正」二篇を書き、『談叢』（『談藪』）に収録している。また、向山も北海道で役人として勤めたことがある。

明治十四年天皇の北海道巡幸の時代背景とその交遊関係から考えれば、学海は北海道に関して、一定の知識をもっていたと考えられる。<sup>33</sup> また、以上の検討で、学海は『蝦夷風俗彙纂』を使いながらも、典拠にあった政治的傾向を消去し、人物の特性を中心に置いた作品として作り上げたことが明らかになったと思う。もちろん、天皇の明治十四年の北海道巡幸によってもたらされた北海道への一般的な関心の高まりという時代背景は無視できないが、学海がこの「蝦夷三孝子二貞婦」という作品で強調しているのは、人物それぞれの「孝」や「貞」であり、趣意はそれらの人物を代表として北海道の風俗の一斑を世人に見せることにあった。現在、すでに特定された『譚海』の典拠本は、随筆類に集中しているが、本稿で取り上げている「蝦夷三孝子二貞婦」の粉本はその類に入れない。これは、学海が『譚海』を創作した際の材源の多様性を示すよい一例となる。また、典拠に対する学海の種々の措置は、歴史・政治離れの部分もあれば、風俗への関心を示す部分もある。しかし、総じていえば、そのアレンジは人物像を強調することをめぐって行っている。これは、『譚海』の人物中心の特色を分析するための具体的な例証ともなっている。

注

- (1) 依田学海「落葉」の評」（『読売新聞』明治二十五年二月五日）。
- (2) 新日本古典文学大系明治編三「漢文小説集」（二〇〇五年 岩波書店）には、『譚海』にある作品をいくつか収められており、池澤一郎は注釈で、その典拠本を指摘した。宮崎修多は池澤氏の指摘以外に、その論文「漢訳文と明治の紀事文」で、『譚海』の第一冊に収録されている作品の典拠本をさらに多く指摘したが、この「蝦夷三孝子二貞婦」はまだ詳しく取り上げられていない。
- (3) ここでの引用は、『蝦夷風俗彙纂』によるもので、なお、旧字はそのままにしたが、異体字・崩し字だけ直した。
- (4) 高倉新一郎『新版アイヌ政策史』（三一書房 一九七二年四月 三七二頁）。
- (5) 高倉新一郎著作集編集委員会編『高倉新一郎著作集』第二巻（北海道出版企画センター 一九九五年九月）三五八頁参照。
- (6) 『日本書紀』の原文の一部分を引くと、「（前略）二人進曰、可以後方羊蹄爲政所焉。（中略）此云字保那、後方羊蹄此云斯梨敵之。政所、蓋蝦夷郡乎。」とある。新井白石はその『蝦夷志』で『日本書紀』の記録に基づき、「後方羊蹄読云シリベシ。即今西部シリベチ地也」というふうに、「後方羊蹄」の発音を「シリベシ」とし、その位置を羊蹄山麓の尻別川一帯とした。
- (7) 高倉新一郎『新版アイヌ政策史』（三一書房 一九七二年四月 二三頁）。
- (8) 高倉新一郎『新版アイヌ政策史』（三一書房 一九七二年四月 六一頁）。
- (9) 高倉新一郎「開拓使刊『蝦夷風俗彙纂』引用解題」（『北海学園大学 経済論集』第二十一巻第四号 北海学園大学経済学会 一九七四年三月）。
- (10) 当書の「引用書目」には、年代、或いは著者不詳の本が存在しているが、本稿では、高倉新一郎前掲資料注九「開拓使刊『蝦夷風俗彙纂』引用書解題」についての指摘に従う。
- (11) 注九引用高倉新一郎論文参照。
- (12) 注九引用高倉新一郎論文参照。
- (13) 滝川市史編集委員会編『滝川市史』（滝川市役所 一九六二年七月 四八頁）。
- (14) 白山友正『増訂 松前蝦夷地場所請負制度の研究』（南巖堂書店 一九七一年）。
- (15) 高倉新一郎『新版アイヌ政策史』（三一書房 一九七二年四月 八五頁）。
- (16) 大場四千男「幕末期ヨイチ場所における林長左衛門の場所請負経営とアイヌ民族の勤労革命」（『北海学園大学経営学会』『北海学園大学経営論集』第八巻第二号 二〇一〇年九月）。
- (17) 堀江敏夫「東蝦夷地の会所」（伊能忠敬研究会編『伊能忠敬研究』第三八号 二〇〇四年十一月）によると、「幕府は一七九九年に、東蝦夷地直轄に当たり、場所請負制度を廃して直捌とした東蝦夷地の各場所の運上屋は会所と改められ、幕吏が詰め合い、従来の運上屋としての機能のほかに、公務をも行う出張役所としての性格を持つようになった。建物の全部が立て替えられ、或は新設されて、旅宿所・倉庫・作事小屋・番屋・厩・堂社などの付属建物なども増加していった」とある。これこそ『蝦夷風俗彙纂』の「アベハナ」に描かれていた時代状況である。
- (18) 大場四千男「幕末期ヨイチ場所における林長左衛門の場所請負経営とアイヌ民族の勤労革命」（『北海学園大学経営学会』『北海学園大学経営論集』第八巻第二号 二〇一〇年九月）。
- (19) 谷本晃久・木田歩・山崎幸治「『蝦夷志料』引用書目誌稿」（『史流』第四一号 北海道教育大学史学会 二〇〇四年三月）。
- (20) 高倉新一郎は『近世蝦夷人物誌』の「解題」で、独松居士を独笑居士と表記し、箱館奉行支配調役向山黄村のことを指すと推論している。
- (21) 特に衾を左前にすることは、漢民族の伝統文化では、死者の格好とされている。
- (22) 花崎皋平『静かな大地 松浦武四郎とアイヌ民族』（岩波書店 一九八八年九月）。
- (23) 高倉新一郎『近世蝦夷人物誌』の「解題」を参照。（『日本庶民生活史料集成』第四巻 三一書店 一九六九年六月）

- (24) 松浦武四郎『竹四郎廻浦日記』（高倉新一郎解説 北海道出版企画センター 一九七八年十月）。
- (25) 花崎皋平『静かな大地 松浦武四郎とアイヌ民族』（岩波書店 一九八八年九月）。
- (26) 滝川市史編纂委員会編『滝川市史』（滝川市役所 一九六二年七月 一五四頁～一五五頁）。
- (27) 花崎皋平『静かな大地 松浦武四郎とアイヌ民族』（岩波書店 一九八八年九月）。
- (28) 学海の毛列津列の話の部分は、のちに「北海貞婦伝」という訓読調の作品になされて、『鑿劍名家豪雄言行録』（河村与一郎編 杉本甚介出版 一八八五年一月）に収録された。また、同書に載せられている「金井仙太郎伝僕寅五郎附」は学海の『譚海』の「孝義復讐」によるところが多いと考える。
- (29) 高倉新一郎『高倉新一郎著作集』第二巻（北海道出版企画センター 一九九五年十二月 二〇七頁）。
- (30) 三木強「明治十四年天皇巡幸と北海道」（『北大史学』通号三八号 北大史学会 一九九八年十一月）。
- (31) 学海日録研究会編『学海日録』第六卷（一九九二年五月、岩波書店） 明治十九年一月五日の日記による。
- (32) 依田学海は、日記で明治十四年の出来事をまとめて記する際に、北海道のことにも次のように触れている。「つらく今年のを按ずるに、主上、北海道に臨幸なるにあたり、北海道官有諸物を関西貿易会社により渡さるべきの議起りたるに、諸新聞及び演説師等皆これを非とし、并せて参議黒田清隆の私あるよしを誹謗して囂々としてやまず。還幸に及び遂にその議をやめられ、つゞきて参議・諸省の長官遷任あり。中興の初より勲勞ありと聞たる大隈参議重信及び農商務卿河野敏謙等官を辞し、その余の属官、去るもの甚多し。」（学海日録研究会編『学海日録』第五卷（一九九二年五月、岩波書店） 明治十四年十二月三十一日記事による。）という記録から、天皇が北海道に臨幸すること、および官有物払下げ事件を当年の大きな事件として受け入れる学海の姿がうかがえる。